



Title	和歌山県有田方言の文末表現「～イシヨ」の記述
Author(s)	榎本, 真子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2023, 19, p. 97-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92435
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

和歌山県有田方言の文末表現「～イショ」の記述

榎本 真子

【要旨】

和歌山県有田方言の文末表現「～イショ」について、形式面・意味面双方の記述を行った。形式的には、「～イショ」は平叙文にのみ付くことができ、前には、名詞・形容動詞・形容詞・動詞が置かれる。名詞と形容動詞には「ヤイショ」という形が、形容詞と動詞、否定形、過去形には「ワイショ」という形がつく。このとき、「ワイショ」という形は、前の音と融合を起こすことが多く、「～イショ」という形が共通して見られる。また、「～イショ」の後ろには、終助詞「ナ」と「ヨ」のみ付くことが出来る。意味的には、標準語の「じゃないか」と共通する意味を持っており、「驚きを表示する用法」「共通認識を要求する用法」「相手の認識を喚起する用法」の3つの用法をもつ。「～イショ」に終助詞「ナ」が付いた「～イショナ」は、標準語の「よね」と共通する意味をもち、聞き手も話し手と同様の認識を持っていることを強く確認する。「～イショ」と「～イショナ」の用法の分析から、「～イショ」は、話し手の認識を目の前にいる聞き手に積極的に伝えようとする意味を持っているのではないかと結論づけた。

【キーワード】和歌山県有田方言、文末表現、確認要求、じゃないか、よね

1. はじめに

和歌山県有田地方の方言¹⁾（以下、「有田方言」とする）には、確認要求の意味を持つ標準語「じゃないか」に相当すると思われる文末表現「～イショ」が存在する。これは以下のように使われる。

- (1) [渋滞しているので全く進まないかと思っていたが、話し手が思っているよりも進んだので驚いて] 渋滞のわりには意外と進まイショ。
(渋滞のわりには意外と進むじゃないか。)
- (2) [全く使っていないものを捨てようとしないう聞き手に対して非難の意を持って] もうこれ使わなイショ。(もうこれは使わないじゃないか。)
- (3) [いつも騒がしい人が静かにしているのを見て驚きを持って] どうしたん？今日は静かヤイショ。(どうしたの？今日は静かじゃないか。)
- (4) [夜になってから外に出ようとする聞き手に対して非難の意を持って] もう外へ出たらあかんよ、暗いワイショ。
(もう外に出てはいけないよ、暗いじゃないか。)

1) 村内（1998:173）によれば、和歌山県の方言区画は大きく3つに分けられる。2節で述べる山口（2015）で取り上げられた和歌山市方言を含む紀北方言、本稿が対象とする有田川町や柏原（2006）で取り上げられた湯浅町の方言を含む紀中方言、紀中以南の地域の方言である紀南方言である。

(5) あんたまだ学生ヤイショ。(あなたはまだ学生じゃないか。)

このような文末表現について、有田川町に隣接する湯浅町の方言談話研究で、出現しているが、詳しく述べられていない(2節参照)。また、このような表現は和歌山市方言と繋がりとされている。後述のとおり、和歌山市方言の文末表現については詳しい研究がなされているが、「～イショ」に関する直接的な研究は見つからない。

また、「～イショ」という文末表現に「ナ」を付けた「～イショナ」という形もあり、標準語の「よね」に相当する表現になると思われる。

(6) もうちょっと食べらイショ ナ? (もうちょっと食べるよね?)

そこで、このような文末表現について、まず、前にどのような品詞が現れるのか、前に現れる品詞とどのように接続するのか、後ろに接続する形式が存在するのか、という形式的な面を扱う。その後、「～イショ」の意味・用法について、標準語の確認要求的表現「じゃないか」と比較して考える。

以下、2節では先行研究をまとめ、問題のありかを明らかにする。3節では「～イショ」の形態的側面を分析する。4節では意味的側面を分析し、「～イショ」の基本的な意味を考察する。5節ではそれまでのまとめと、今後の課題を提示する。

2. 先行研究と問題のありか

本節では、和歌山県の方言の文末表現についての先行研究をまとめる。2.1節では、有田川町に隣接する湯浅町の方言を扱った研究に触れる。この研究の中で、「ヤイショ」「ヤショ」が、和歌山市の方言と繋がりとされている。2.2節では、その和歌山市方言の文末表現についての研究に触れる。

2.1. 湯浅町の方言談話研究

本稿で扱うのは有田地方、特に有田川町の方言であるが、地理的に隣接しており、有田郡に含まれる湯浅町の方言については、方言談話研究がなされている。柏原(2006)では、湯浅の方言談話から、湯浅町の方言を位置づけようとしている。この方言談話の中に、「ヤイショ」や「ヤショ」という形が見られた。

(7) ヤジルンヤイショ (野次るのだよ)

(8) ユーンヤイショ/ユーンヤショ (言うのだよ)

(9) エーンヤショ (良いのだよ)

(以上、柏原 2006:6 より)

これらについて柏原(2006)は、次のように述べている。

断定助動詞『ヤ』に強調の終助詞『ワイショ・ワショ←ワシテヨ (だよ、じゃないか)』が付いて半母音w脱落で『ワ』が隠在し『ヤイショ』『ヤショ』となったもの。

(柏原 前掲)

また他形式との関連については、次の記述がある。

この語法は、和歌山(中略)地方で盛んな『ワシテ』類すなわち『無いワシテ、ワヒテ、ワイテ、ワイショ、ワショ、ワッショなど』『有ラ(←有るわ)シテ、ヒテ、イテ、イ

ショ、ッショなど』『ヤ（←やわ）シテ、ヒテ、イテ、イショ、ッショなど』に繋がる。

（柏原 前掲）

このように、柏原（前掲）では、「ヤイショ」「ヤショ」について、標準語訳を「じゃないか」とし、「強調の終助詞」とまとめるにとどまっているが、「ワシテ」類とのつながりを指摘している点が注目される。

2.2. 和歌山市方言の文末表現「ワシテ」

次に、柏原（2006）において「ヤイショ」「ヤショ」に繋がるとされている、和歌山市方言の「ワシテ」に関する研究を見る。山口（2015）では、和歌山市方言の文末表現「ワシテ」について取り上げているが、この形式は、本稿で扱う「～イショ」とよく似た形式と意味を持っていると思われる。また、山口自身も今後の課題として、「文末表現『～シテ』から出自したとされる（中略）『～イショ』」についても検討が必要だとしている。

山口（2015）は、和歌山市方言における文末表現「～シテ」について、形式的・意味的特徴をまとめている。形式的特徴については次のように述べている。

平叙文の文末に生起し、概して『ワシテ』という形式をとり、名詞相当の句や節に後接する場合にのみ『ヤシテ』という形式をとる。

山口（2015:69）

また、「ワシテ」の「ワ」が前接部分と融合した形も見られることについて、『ワ』の『融合』と呼んで、どのように融合しているかについて分析し、融合形と非融合形の意味の違いについても言及している。

意味的特徴については、「ではないか」に共通する用法を持つ「ワシテ」と、共通しない「ンヤシテ」に大きく分けて、それぞれについて分析している。「ワシテ」「ンヤシテ」の意味についての山口（2015）の記述を挙げる。

○「ワシテ」の意味

話し手の発話時と発話以前の間、あるいは話し手と聞き手の間に認識のずれがあり、話し手の発話時の認識を、認識すべき確定的なものとして提示する。

（山口 2015:59、(43)）

○「ンヤシテ」の意味

聞き手の認識になく聞き手が知り得ない既定の事柄を伝達し、聞き手と共有していこうとする。

（山口 2015:64、(67)）

また、この2つの用法に共通する意味から、「～シテ」の基本的な意味について、「話し手の認識を発話の現場に引き出し、自分や聞き手との共有の認識領域にもってくるべく表出する」（p.68）ものであると述べている。

2.3. 問題のありかと本研究の目的

先行研究では、「ヤショ」「ヤイショ」という形式について、「強調の終助詞」と述べられており、和歌山地域の「ワシテ」などの形式と繋がりがある、という記述が見られる。その

和歌山県和歌山市の方言で、よく似た形式であると思われる「ワシテ」に関しては研究があり、そこで述べられていることと「～イショ」を対照すると、同じように記述できるように思われる。しかし、「ヤショ」「ヤイショ」には具体的にどのような用法があるのかといったことは研究がなされていないようである。そのため、本稿では、和歌山県有田方言の「～イショ」について、和歌山市方言の「ワシテ」と同じような形式と用法を持っているかについて筆者²⁾の内省によって記述する。具体的には、「～イショ」が含まれている文の、前後の接続部分について分析し、どのような品詞が接続できるのか、どのようにして接続するのか、後接する終助詞はあるのかについて考える（3 節）。その後、標準語の確認要求的表現と比較しながらどのような用法を持っているかを分析し、「～イショ」の基本的意味を明らかにする（4 節）。5 節でまとめと今後の課題を述べる。

3. 形態的側面

ここでは、「～イショ」の形態的側面について見ていく。その前提になるものとして、3.1 節では和歌山方言における「ワ」の融合について取り上げる。そのことで、「～イショ」の形態的側面の理解が進むと考えられるからである。3.2 節では「～イショ」に前接する品詞について、3.3 節では「～イショ」が使われる文タイプと、後接する終助詞について、それぞれ見ていく。

3.1. 「ワ」の融合について

まず初めに、和歌山方言の「ワ」の融合について見ておく。この現象が、「～イショ」の形態的側面を見る際に、重要になってくると思われるからである。和歌山方言では、文末詞「ワ」が、前接する音と融合した形をとることがある。

- (10) その問題は簡単にデキラ（＜出来るワ）。
- (11) もう今日はアカナ（＜あかんワ）。
- (12) あの子はいつもようワラワ（＜笑うワ）。
- (13) これ私の靴と {チガワ／チャワ}（＜違うワ／ちゃうワ）。

このように、文末詞「ワ」が、「/w/の音を脱落させ/a/の音が/u/や/n/で終わる前接部分と融合する」現象を、山口（2015）では、「『ワ』の融合」と呼んでいる。このような融合は、必ず起きるとは限らず、融合形と非融合形が併存している。また、前接する部分にどのような音が来ても融合するというわけではなく、/i/の音が前接する場合は融合が起きない³⁾。

- (14) まだ明るいワ。 cf. *明るヤ (iwa>*ia>*ja)
- (15) 甘いもん食べたいワ。 cf. *食べたヤ

2) 筆者は1999年に和歌山県有田川町で生まれ、19歳まで同地で過ごした。母方言は有田方言である。記述にあたって、自身の内省で判断が難しいものについては、同じく有田川町出身の中年層男女各1名に対して確認を行った。

3) /e/の音が前接する場合も、融合は起きない。

〈1〉それええワ。

すなわち、形容詞が前接する場合は、「ワ」の融合は起こらないということである。

このように、形容詞や、「動詞+たい」が前接する場合には、「ワ」は融合せずに残る。過去形の「た」に「ワ」が続いた場合については、次節で述べることにする。

3.2. 「～イショ」に前接する品詞

ここから具体的な「～イショ」の形式的側面を見ていく。「～イショ」は、名詞述語文、形容動詞述語文、形容詞述語文、動詞述語文に生起する。名詞述語文と形容動詞述語文には、「ヤイショ」という断定辞「ヤ」が入った形が接続し、単独で接続することはない。

(16) まだ {学生ヤイショ／*学生イショ}。(まだ学生じゃないか。)

(17) えらい {静かヤイショ／*静かいショ}。(とても静かじゃないか。)

形容詞述語と動詞述語文では、「ワイショ」という「ワ」が入った形になり、こちらも単独で接続することはない。

(18) もう {暗いワイショ／*暗いイショ}。(もう暗いじゃないか。)

(19) その靴 {ええワイショ／*ええイショ}。(その靴いいじゃないか。)

(20) 綺麗に {食べるワイショ／*食べるイショ}。(綺麗に食べるじゃないか。)

(21) あんたもう学生と {違うワイショ／*違うイショ}。

(あなたはもう学生じゃないじゃないか。)

また、否定形や「動詞+たい」の形、アスペクト形式の「ちやる/ちやある」⁴⁾、過去形にも接続することが出来る。

(22) いくら言うても {起きん／起きやん} ワイショ。 [否定形]
(いくら言っても起きないじゃないか。)

(23) 甘いもん食べたいワイショ。 [動詞+たい]
(甘いものが食べたいじゃないか。)

(24) 知らん間に {出来ちやるワイショ／出来ちやあるワイショ}。 [アスペクト]
(知らない間に出来ているじゃないか。)

(25) まだちょっとしか食べてないワイショ。 [アスペクト・否定形]
(まだ少ししか食べていないじゃないか。)

(26) こないだおんなじの買ったワイショ。 [過去形]
(この間同じものを買ったじゃないか。)

(27) 雨降ったさけアトラクション乗れ(や)なんだワイショ。 [否定・過去形]
(雨が降ったからアトラクションに乗れなかったじゃないか。)

この時、前節で述べた「ワ」の融合が起こるものがある。非過去形の動詞や全ての否定形、進行形に接続する場合、しばしば音の融合が起こり、以下のような形で現れる。ただし、/i/の音で終わる、形容詞や「動詞+たい」という形は融合が起こらないため必ず「ワイショ」という形になる。

(28) 綺麗に食べらイショ (<食べるワイショ)。 [動詞・非過去形]

(29) あんたもう学生と違わイショ (<違うワイショ)。 [動詞・非過去形]

4) 「ちやる」と「ちやある」は、言い方の違いだけで、全く同じ意味だと考えられる。

(30) いくら言うても {起きなイショ／起きやなイショ}。

(＜起きんワイショ／起きやんワイショ)

[否定形]

(31) 知らん間に {出来ちゃらイショ／出来ちゃあらイショ}。

(＜出来ちゃるワイショ／出来ちゃあるワイショ)

[アスペクト・非過去形]

過去形については、和歌山市方言の「ワシテ」について、「/w/の音が脱落し/a/の音が短音化されて、前接部分と融合すると考えられる」(山口 2015) と述べられているのと同様だと考えられる。すなわち、以下のような形として現れることもあるということである⁵⁾。

(32) こないだおんなじの買うたイショ。(＜買うたワイショ)

(33) 雨降ったさけアトラクション乗れ(や)なんだイショ。(＜乗れ(や)なんだワイショ)

これらは、融合形の方がよく聞かれるが、非融合形が全く使われないというわけではない。その使われ方の違いについては本稿では扱わないこととする。

ただし、融合のメカニズムは過去形と同じだと考えられる名詞述語文や形容動詞述語文においては、「ヤワイショ」という、融合していないような形が現れることはなく、必ず「ヤイショ」となる。

(34) まだ {*学生ヤワイショ／学生ヤイショ}。

(35) えらい {*静かヤワイショ／静かヤイショ}。

ここまで、「～イショ」がどのように接続するのかを、「ワ」の「融合」という現象を踏まえながら見てきた。「～イショ」の前には、名詞・形容動詞・形容詞・動詞を置くことができ、名詞・形容動詞述語文の場合は、「ヤイショ」という形に、形容詞・動詞述語文、品詞に関わらず否定文、過去形の場合は「ワイショ」という形になることを述べてきた。また、接続には和歌山方言によく見られる「ワ」の「融合」がよく起きるということも述べてきた。「ヤイショ」についても、「ワ」が融合して固定化した形ではないかと考えられるため、元々の形は「ワイショ」なのではないかと考えることが出来るだろう。

3.3. 文タイプと、後接する終助詞

まず生起できる文タイプについて見ていく。「～イショ」は平叙文にのみ付いて、疑問文や命令、勧誘、推量、また、従属節にも使われない。

(36) 意外と食べらイショ。

[平叙文]

(37) *これ食べらイショ？

[真偽疑問文]

(38) *どこで食べらイショ？

[疑問詞疑問文]

(39) *もっといっぱい食べろワイショ。

[命令文]

(40) *一緒に食べようワイショ。

[勧誘文]

(41) *あの子ども食べるやろうワイショ。

[推量形]

5) 有田方言には、過去のことがらを表す形式として「タ」の他に「ト」という形式がある。

〈1〉 なんとかデキト。(なんとか出来た。)

次に示すようにこの「ト」にも「～イショ」が付くことができるが、「タ」と「ト」の違いについては未詳である。

〈2〉 昔東京行っトイショ。(昔東京に行ったじゃないか。)

(42) *明日食べるワイショから、残しといて。 [従属節]

次に、終助詞については、「～イショ」には「ナ」と「ヨ」を後接することが出来る。

(43) これ食べらイショ ナ? (これ食べるよね?)

(44) 頑張ったら出来らイショ ヨ! (頑張れば出来るじゃないかよ!)

「ヨ」が続く場合は、次節以降で説明する「～イショ」の用法がより強められるように思われるが、本稿ではこの点については扱わない。「ナ」が続く場合の意味については、次節で詳しく考えることにし、ここでは、後接することが出来るということだけを述べておく。

4. 意味的側面

ここから、「～イショ」の意味・用法について考える。この文末表現は、基本的に標準語の「じゃないか」の用法のうち、三宅(1994)のデハナイカⅠ類や、蓮沼(1995)で指摘されている「じゃないか」が持つ用法で説明がつくものがほとんどである。ただし、「～イショナ」という形を取る場合は、「じゃないか」ではなく、「よね」に近い用法を持つようになる。まずは、4.1節で標準語の確認要求の用法に関する研究を参照し、分析の枠組みとする。次に、4.2節で「～イショ」という形が持つ意味・用法について考える。その後、4.3節で「～イショナ」という形についてその意味・用法を考える。これらをふまえて、4.4節では「～イショ」の基本的意味について考えていく。

4.1. 分析の枠組み：標準語における確認要求の用法の違い

「～イショ」が標準語の「じゃないか」や「よね」などに相当する用法を持っていると考えられるため、「～イショ」の分析に入る前に、標準語の確認要求にはどのような形式があるのかを整理する。

田野村(1988)は、否定疑問文のデハナイカを、用法や構文・音調などの面から、第一類から第三類の3つに分類した。それに対して、三宅(1994)は、田野村(1988)で第三類に分類されている『ない』が否定辞本来の性格を発揮する」デハナイカを除く、第一類と第二類の2つの分類を、確認要求的表現という観点から詳細に分析し、デハナイカⅠ類とデハナイカⅡ類と呼んだ。デハナイカⅡ類については、推量よりも弱い見込みを含意する、推測を基本的な意味とし、「対象を命題の真偽とし、命題が真であることの認識を要求する」、「命題確認の要求」という用法があると述べた。デハナイカⅠ類については、「知識確認の要求」という用法を担い、その下位類として、「潜在的知識の活性化」と「認識の同一化要求」の2つの用法があるとしている。前者は、「話し手と聞き手が潜在的に共有していると思われる知識を活性化させる」用法で、後者は、「聞き手に話し手と同じ認識を持つことを要求する」用法であると説明されている。また、何らかの確認は要求しているが要求の度合いが弱いものとして、「弱い確認の要求」という用法も挙げている。さらに、確認要求的な表現ではないが、「驚きの表示」という用法もあるとしている。これらについて、ダロウとネとの比較も行っている。ダロウは、「命題確認の要求」も「知識確認の要求」も、両方表すことができ、かなり強い見込みを持った確認の要求は、ダロウでしか表せないとしている。ネは、「弱い確認の要求」の用法を持つデハナイカⅠ類と置き換え可能であるが、デハナイカの方

が「驚きのニュアンスが加わっている」と述べられている。

蓮沼（1995）では、「だろう」「じゃないか」「よね」が確認的に用いられる場合の5つの用法について考察し、それぞれに固有の確認用法から、その形式の特性を考えている。5つの用法とは、〈共通認識の喚起〉〈認識形成の要請〉〈推量確認〉〈認識生成のアピール〉〈相互了解の形成確認〉である。このうち、〈推量確認〉は、「だろう」に固有の用法、〈認識生成のアピール〉は、「じゃないか」に固有の用法、〈相互了解の形成確認〉は、「よね」に固有の用法であると説明している。そのうえで、「だろう」の基本的機能は、「話し手が直接的に知り得ないことを想像を介して『推し量る』」もの、「じゃないか」の基本的機能は、「話し手の知識獲得の詠嘆的表明」、「よね」の基本的機能は、「相互了解が可能となるような確実な知識を形成した上で、その適合を確認する」といったものであるとし、それぞれの固有の用法から、他の用法に派生しているのではないかと考えている。ここでは、「じゃないか」「よね」に注目するので、その用法をまとめると、表1のようになる。

表1 標準語における確認用法の違い（蓮沼 1995:399 より作成）

	じゃないか	よね	備考
〈共通認識の喚起〉	○	○	-
〈認識形成の要請〉	○	×	-
〈推量確認〉	×	☆	互換性をもつ場合がある
〈認識生成のアピール〉	◎	×	-
〈相互了解の形成確認〉	×	◎	-

凡例 ○：当該用法で使用可能（ただし、それぞれの意味が等価であるとは限らない）

◎：当該用法に固有の用法 ×：当該用法で使用不可能

☆：当該用法と互換性をもつ場合があるが、その用法は異なる

4.2. 「～イショ」の用法

前節で標準語の確認要求について整理した。これを踏まえてここでは、「～イショ」に3つの用法があることを標準語の「じゃないか」の用法と比較して述べていく。4.2.1 では、話し手の驚きの認識を表示する用法、4.2.2 では、共通認識を要求する用法、4.2.3 では、相手の認識を喚起する用法について、それぞれ述べる。

4.2.1. 驚きの認識を表示する用法

蓮沼（1995）では、「だろう」「よね」「じゃないか」の3つの形式のうち、「じゃないか」だけが持つ用法を〈認識生成のアピール〉だとし、「じゃないか」の基本的機能を、「話し手の知識獲得の詠嘆的表明」だとしている。また、三宅（1994）では、これと同じような用法を、「驚きの表示」と呼んでいる。「～イショ」にもこのような用法があり、話し手にとっての意外性を表す。これには、話し手自身が経験したり知覚したりした事態に対する意外性も、目の前の聞き手がする行動に対する意外性も含まれる。

〔話し手自身が経験・知覚した事態に対する意外性〕

(45) 雨降っちゃあらイショ。(雨が降っているじゃないか。)

(46) せっかく傘持ってきたのに、雨ら いっこも降らなんだイショ。

(せっかく傘を持ってきたのに、雨なんて全く降らなかったじゃないか。)

[相手の行動に対する意外性]

(47) いっこも進んでないワイショ。(全く進んでいないじゃないか。)

(48) 上手に書けたイショ。(上手に書けたじゃないか。)

(45) (46) はそれぞれ、「雨が降らない」「雨が降る」と思っていたが、実際にはそれとは反対のことが起こっており、話し手が驚いていることを表す。相手の行動に対する意外性も、「進んでいると思っていたのに全然進んでいない」、「思っていたよりも上手に書けている」といった、話し手の予想に反することに驚いていることを表し、予想より下回っている場合は、相手を非難するのに、上回っている場合は、相手を称賛するのに使われる。

4.2.2. 共通認識を要求する用法

蓮沼 (1995) で〈共通認識の喚起〉、三宅 (1994) で「知識確認の要求」の下位分類の一つ、「認識の同一化要求」とまとめられている用法も、「～イショ」には存在している。話し手自身が思っていることやしている行動を、相手に認識してもらうように要求したり、同じように認識してもらうことを要求したりする意味合いを持つ。

(49) 言われやんでももう {しちやイショ／しちやあらイショ}。

(言われなくてももうしているじゃないか)

(50) もう外出たらあかんよ、暗いワイショ。

(もう外に出てはいけないよ、暗いじゃないか。)

(51) うちって大家族ヤイショ。(私の家って大家族じゃない。)

これらは、話し手自身が行っている行動を認識してほしいという気持ちや、同じような認識を持ってほしいという気持ちを表している。これは、話し手と聞き手が違う認識を持っていることを示すとも言える。聞き手も話し手と同じ認識を持っていて当然であるのに、そうではないために、同じ認識を持つように要求し、聞き手がそのような認識を持っていないことに対する話し手の怒りや心配の気持ちを表す。

4.2.3. 相手の認識を喚起する用法

〈認識形成の要請〉(蓮沼 1995)、「潜在的共有知識の活性化」(三宅 1994) という用法も、「～イショ」は持っている。聞き手がすでに知っていることや思っているであろうこと、または、聞き手が実際に行った行動で、現場で思い出せていないことに対する認識を喚起する用法がある。否定形や過去形を用いて、「確かに話し手はそうに考えているが聞き手はどうして分からないのか、分かって当然だ」ということを示す場合が多い。

(52) もうこれ、いっこも使てないワイショ。(もうこれ、全く使っていないじゃないか。)

(53) もうこの服、いっこも着てないワイショ。

(もうこの服、全く着ていないじゃないか。)

(54) 何回^ゆ言うてもせーへなイショ。(何回言ってもしないじゃないか。)

(55) 昔東京行ったイショ。(昔東京に行ったじゃないか。)

(56) 宿題しとけて言うたイショ。(宿題しておけて言ったじゃないか。)

これらは、聞き手がすでに知っているはずのことを思い出させるような用法であるため、前節で述べた「共通認識を要求する用法」よりも、聞き手に強く働きかける。そのため、聞き手に対する非難や呆れを表現することがほとんどである。

4.3. 「～イショナ」の意味・用法

蓮沼(1995)では、標準語の「よね」についても聞き手の確認を要求する用法があるとして、この基本的機能を「相互了解が可能となるような確実な知識を形成した上で、その適合を確認する」としている。また、山口(2015)でも、「複合形式『ワシテナ』は、聞き手に対し確認をとるという点で、蓮沼(1995)で言うところの『よね』の『相互了解の形成確認』の用法に近くなる」と述べられている。「～イショ」に終助詞「ナ」がついた「～イショナ」という形でも似たような意味になり、聞き手も話し手と同様の認識を持っていることを強く確認する。

(57) 皆からの評判わりけど、これ美味しいワイショナ？

(皆からの評判は悪いけど、これ美味しいよね？)

この用法では、話し手と第三者の認識にずれがある場合に使われることがしばしばある。

(57)では、「他の人はそういうけれど、あなたは私と同じで美味しいと思っているはずだが、それで正しいか」ということを聞き手に確認している。この時、聞き手はもちろんそれに反対してもよいが、同じ認識を持つことを強要されているように感じることもある。そのため、反対すると話し手から驚きを表現されることが多い。

(58) A：皆からの評判わりけど、これ美味しいワイショナ？

(皆からの評判は悪いけど、これ美味しいよね？)

B：いや、私はそう思わんわ。(いや、私はそう思わないね。)

A：え！ほんまけ？(え！本当？)

また、(59)(60)のように、話し手自身の過去の知覚や行動を聞き手に確認する場合にもよく使われる。

(59) あれ、昨日って雨降ったイショナ？(あれ、昨日って雨降ったよね？)

(60) 私もうゴミ出して来たイショナ？(私もうゴミ出して来たよね？)

この時も、第三者との認識のずれという見方ができ、発話の現場にいない「過去の自分」という第三者が認識したことと、発話の現場にいる自分の認識にずれがあるため、聞き手に確認しているということである。

さらには、聞き手の認識の喚起をより強めたいときにも使われることがある。

(61) もうこれ、いっこも使てないワイショナ？(もうこれ、全く使っていないよね？)

(62) 昔一緒に東京行ったイショナ？(昔一緒に東京に行ったよね？)

(63) 宿題しとけて言うたイショナ？(宿題しておけて言ったよね？)

(64) 何回言うてもせーへなイショナ？(何回言ってもしないよね？)

(65) いっこも進んでないワイショナ？(全く進んでいないよね？)

これらは、「自分の認識はほぼ確実に合っていると思うのだが、そうか？」という確認を聞

き手にしているということになる。特に(63)(64)(65)は、確認に対して聞き手に答えてほしいのではなく、聞き手に自らの状況を改めて認識させ、反省するように求めるものである。このような用法もあるために、話し手から同じ認識を強要されているように感じるとも考えられる。

4.4. 「～イショ」の基本的な意味

ここまで、「～イショ」と「～イショナ」という形に分けて、それぞれの意味・用法について考えてきた。「～イショ」の3つの用法と、「じゃないか」では表現することの出来ない「～イショナ」の用法をまとめて考えると、「～イショ」は、話し手が持った認識を、目の前にいる聞き手に積極的に伝えようとする機能を持っているのではないかとと思われる。「驚きの認識を表示する用法」では、話し手がその場で知覚した認識を、驚きを持って伝えようとしている。「共通の認識を要求する用法」では、話し手自身の認識と同じ認識を持ってもらおうと働きかけている。「相手の認識を喚起する用法」では、聞き手に対する話し手の認識を伝えて、きっと聞き手もそれと同じ認識を持っているはずだということを訴えている。「～イショナ」についても、話し手が正しいと思っている認識を、相手にも強要するほどの程度で、伝えようとしていると言える。「～イショ」は、話し手が是非聞き手に伝えたいと思っている認識を、強く伝えようとする機能を根幹に持つのではないかとと思われる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、和歌山県有田方言の文末表現「～イショ」の形式的側面と意味的側面について記述し、次のことを指摘した。

(a) 形式的側面（文タイプと、「ワ」の融合を起こす接続）

「～イショ」は、平叙文にのみに付く文末表現である。前には名詞・形容動詞・形容詞・動詞を置くことができ、名詞・形容動詞述語文の場合は、「ヤイショ」という形に、形容詞・動詞述語文、品詞に関わらず否定文、過去形の場合は「ワイショ」という形になる。接続には和歌山方言によく見られる「ワ」の「融合」がよく起き、「ヤイショ」についても、「ワ」が融合して固定化した形ではないかと考えられるため、元々の形は「ワイショ」と考えられる。また、後ろには、終助詞「ナ」「ヨ」を付けることが出来る。(3節)

(b) 「～イショ」の持つ3つの用法

「～イショ」は、「驚きの認識を表示する用法」「共通認識を要求する用法」「相手の認識を喚起する用法」の3つの用法がある。これらは全て、標準語の「じゃないか」と同じような用法であると言える。(4.2節)

(c) 「じゃないか」とは違う意味を持つ「～イショナ」

「～イショ」に終助詞「ナ」が付いた形である「～イショナ」は、聞き手も、話し手がほぼ確実だと思っている認識と同様の認識を持っているかどうかを強く確認する意味を持つ。第三者と話し手の認識にずれがある時や、聞き手の自らの状況を改めて認識させ反省させようとする時にも使われる。(4.3節)

(d) 「～イショ」の基本的意味

「～イショ」と「～イショナ」に共通の用法から、「～イショ」には、話し手が持った認識を、目の前にいる聞き手に積極的に伝えようとする機能があるのではないかと考えられる。(4.4 節)

今後の課題として、4つのことを述べる。まずノダ文との共起について考えるという点が挙げられる。「～イショ」は、ノダ文に後接して「ンヤイショ」という形もとることが出来る。これも「～イショナ」のように、「じゃないか」にはない用法を持っている。

(66) 昨日図書館行ったンヤイショ。(昨日図書館に行ったんだよね。)

これについて、ここでは考えられなかったが、今後この用法についても考える必要がある。標準語の場合、(67)のようにデハナイカI類の「ではないか」がノダ文に接続することができるが、こういった文についても「ンヤイショ」が使われるのか、それとも、「ンヤイショ」でひとまとまりの意味があるため別の形式が用いられるのか、といったことも考える必要があるだろう。

(67) やっぱり君は学生なんじゃないか。

次に、「ワイショ」の接続に関して、「ワ」の「融合」という現象があることを述べたが、より「～イショ」の意味だけを明らかにするためには、まず和歌山方言の終助詞「ワ」に、どういった意味や働きがあるのかを考えなければならないだろう。また、「ワイショ」という形は、融合形と非融合形が併存していると述べたが、融合形の方がより多く聞かれるように思われる。非融合形はどのような時に使われるのか、融合形と意味に違いはあるのかということを、アンケートなどを取って調査する必要があるように思われる。加えて、この「～イショ」が和歌山県有田地方の中でもどこで使われているのかについて、より明確な地域の指定をする必要があるのではないかとと思われる。

また、有田方言には、「ジョ」という文末表現があり、名詞・形容動詞、指示詞の後について使われるが、この後に「ナ」が接続した「ジョナ」という形式は「ヤイショナ」と同じような意味で使われる。

(68) A: さっき会ったあの人、なんて名前かな?

(さっき会ったあの人、なんて名前だっけな?)

B: ○○さんやいしょ。(○○さんじゃないか。)

A: あー、そうジョそうジョ。思い出しと。(あー、そうだそうだ。思い出したよ。)

(69) 明日って雨ジョナ?(明日って雨だよな?)

(70) 今日はなんか静かジョナ?(今日はなんだか静かだよな?)

「ジョナ」が「ヤイショナ」と完全に置き換え可能なかどうかや、「ジョ」が単独で用いられる場合の用法についても考えたい。

さらには、関西方言の別の形式との比較も考える必要があるだろう。関西方言には「ヤナイカ」「ンチャウ(カ)」「ヤン(カ)」「ガナ」という確認要求の形式も存在している(高木 2005)。このうち、「～イショ」に近い用法で使われるのは、〈認識の再形成〉の用法を持つ「ヤナイカ」「ヤン(カ)」「ガナ」だと思われる。また、松丸(2007)に記述のある関西方言の「ヤンナ」と「ヨナ」は、「～イショナ」に近い用法を持っているとも考えられる。これらの形式

は和歌山県有田地方でも使われているのか、使われているならば、どのような使い分けがなされているのか、といったことを考えることが必要である。

【参考文献】

- 柏原卓（2006）「湯浅の方言談話研究」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』57, pp.1-8.
- 高木千恵（2005）「関西若年層にみられる標準語形ジャナイ(カ)の使用」『日本語の研究』1-2, pp.19-34, 日本語学会.
- 田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152, pp.123-109, 国語学会.
- 蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為—『だろう』『じゃないか』『よね』の確認要求—」仁田義雄編『複文の研究（下）』pp.389-419, くろしお出版.
- 松丸真大（2007）「関西方言のヤンナとヨナ」『阪大日本語研究』19, pp.1-15, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- 三宅知宏（1994）「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1, pp.15-26, 大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座.
- 村内英一（1998）「和歌山県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学7 近畿地方の方言 第二版』pp.171-193, 国書刊行会.
- 山口華奈（2015）「和歌山市方言における文末表現『～シテ』」『阪大社会言語学研究ノート』13, pp.52-71, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

えのもと まこ（大阪大学学部生）